

第19回日本緩和医療薬学会年会

Maruishi
Pharmaceutical
Co., Ltd.

信 頼 と 合 意

メディカルセミナー6

“医師×薬剤師”の視点で考える “実践的”緩和ケア鎮痛管理戦略

日時

2026年 5月31日 (日)

12:30 ~ 13:30

会場

第2会場

和歌山城ホール 小ホール

〒640-8156 和歌山県和歌山市七番丁25-1

座長

奥田 真弘 先生

大阪大学医学部附属病院 教授・薬剤部長

● 本セミナーは事前申込制です
事前参加登録期間での事前予約（先着順）

「多職種で取り組む、安全で理想的なオピオイド鎮痛薬の管理」

演者

谷口 彩乃 先生

京都府立医科大学附属病院 疼痛・緩和ケア科

「病薬連携によるオピオイドテレフォンフォローアップ
(TFU) が担う 疼痛管理向上と不適切使用防止への貢献」

演者

田淵 祐輔 先生

京都府立医科大学附属病院 薬剤部 係長 疼痛緩和チーム

共催：第19回日本緩和医療薬学会年会 / 丸石製薬株式会社

「多職種で取り組む、安全で理想的なオピオイド鎮痛薬の管理」

がん患者の痛みに対して、オピオイド鎮痛薬は中心的な役割を担う薬剤である。導入時や増量時には、適正な内服方法の指導、効果と副作用の評価が不可欠であり、処方医と薬剤師の円滑な連携が求められる。特に、保険薬局による調剤後の電話フォローアップは、処方後の患者の状況を迅速に医療機関へ共有でき、以降の診療に大きく寄与する。

一方で、オピオイド鎮痛薬は優れた鎮痛効果を持つ反面、その特性から不適切使用に陥りやすい側面も有する。治療目的以外で精神的効果を得るための乱用・依存、情緒的苦痛への対処として薬剤を使用するケミカルコーピングなどが代表的である。また、痛みの増悪への予期不安から、頻回に薬剤を使用するケースも臨床でしばしば経験される。不適切使用を疑う際には、心理社会的な要因、併存する精神疾患や認知機能の問題など背景要因の評価も欠かせない。

さらに、がんサバイバーの増加に伴い、長期にオピオイド鎮痛薬を使用する患者が増えており、不適切使用の問題は今後さらに顕在化すると考えられる。こうした問題に対しては、多職種による継続的な観察・情報共有が早期発見につながり、患者に生じうる不利益を最小化することができるであろう。

本講演では、オピオイド鎮痛薬の不適切使用に関する知識を整理し、多職種で取り組む、安全で理想的な緩和ケアにおけるオピオイド鎮痛薬管理のあり方について検討したい。

谷口 彩乃 先生

「病薬連携によるオピオイドテレフォンプォローアップ (TFU) が担う 疼痛管理向上と不適切使用防止への貢献」

オピオイド鎮痛薬は、がん性疼痛の管理において不可欠な薬剤であるものの、定期薬と頓服薬の混同、自己判断による服用方法の変更、さらには不安や精神的苦痛を和らげるためのコーピング目的での頓服乱用など、患者の理解不足や服薬指導の機会不足により不適切使用が起こりうる。当院では2019年6月より疼痛・緩和ケア科と連携のもと、保険薬局によるオピオイドTFUを開始した。TFUとは、保険薬局が調剤後に患者へ電話にて服薬状況・副作用・疼痛コントロールの状況を確認し、その報告内容を薬剤部経由で処方医および看護師を含む他職種と共有する取組である。疼痛管理の向上および副作用の早期発見を主たる目的としており、不適切使用の早期発見・予防もその重要な役割の一つである。

今回、薬局薬剤師によるTFUを通じて不適切使用が早期に発見・改善された3症例を経験した。①オピオイド速放散を制吐目的で誤使用していた症例、②定期薬と頓服薬の区別がされず重複服用した症例、③自己判断で頓服を定期的に服用した症例、いずれも電話による患者への直接確認が早期発見の契機となり、速やかな介入につながった。

服薬期間中に患者と直接関わることのできる薬局薬剤師の役割は大きく、病薬連携によるTFUは疼痛管理の質向上・副作用の早期介入・不適切使用防止を包括的に支える有効な手段となりうる。適切な情報共有体制の整備と連携強化が、外来がん患者のQoL向上につながると考える。

田淵 祐輔 先生